

●図書紹介●

『生活科の新生を求めて～幼小連携から総合的な学習まで～』

木村吉彦 著

本書は、著者が10年間継続して進めてきた実践的研究をまとめたものである。

平成元年版学習指導要領に登場した新教科「生活科」に、氏は、幼児教育研究の立場から、この研究に取り組んでいる。筆者から見れば、幼小連携・総合的な学習など子ども中心主義の教育改革の根本思想と連動した「生活科」設置であった。

氏は本書第1部「幼児教育と生活科」で詳しく述べている。とくに、なぜ生活科なのかについて、高度産業社会においては、これまでの啓蒙主義的な教育観による子どもの「自己形成空間」は急速に解体しており、いかに子どもの生活世界のなかに「自己形成空間」を再生させるかが教育課題であることを論究している。回復の手だてとして、①多様な「経験」の回復、②心身の一元的把握、③共同性の回復を挙げ、生活科の役割を説いている。

第2部「新しい学校教育と生活科」では、本書のメインとなる生活科教育の実態を実践研究として、たとえば、第4講では、サブタイトルに“何が変わったのか？ 変わろうとしているのか？”と付しているように、前向きに明らかにしようとしている。生活科を通じての子どもたちの変容を次のように述べている。「1・2年に共通して育ったと言える力は、興味をもってかかわり調べたことを『言葉や絵で表現する』力である。とにかく、自分の興味・関心のあるものについて自分なりの方法を見付けて自己表現する力が付いたと言えそうである」「現場教師たちが、生活科の授業を通してこれまで以上に『主体性』や『自己表現力』をより自覚的・意識的に育てようとした結果であることは間違いない」と調査結果に基づいて結論する（109頁）。このような

成果に基づきながら、生活科の教育課題について、評価論・教科論・発達論・学力論そして、カリキュラム論がつぎつぎと分析・考察され、論究されている。

第3部「生活科のこれから」では、生活科実践の現状からみて、その設立趣旨がまだまだ不徹底であり、「初心」に帰って「新生」＝「子どもと共につくる生活科」を実践し、日本の子どもたちの窮状を救う使命も課せられていることについて、実践的課題を明らかにしている。氏は、生活科の課題として、①個性重視と生涯学習社会への基礎づくり、②生活環境の激変の中で「内から育つ力」の復権、③学校の主人公を子どもにとりもどす、の3点を挙げ、それぞれについて詳述している。さらに、総合的な学習への展望を明らかにするとともに生活科の基礎・基本とは何かで締めくくっている。

今日、生活科・総合的な学習が、現場では一方で学力論議のなかで、必ずしも歓迎されない状況もあるなかで、今一度、21世紀の教育改革の方向性を考えていくうえで、本書が指し示す教育実践研究に着目してほしいというのが筆者の願いである。

(上越教育大学名誉教授 二谷貞夫)

●日本文教出版、A5判、263頁、2,100円(税込)